

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320154

研究課題名(和文)「ヴィクトリア朝幻想」の形成と解体

研究課題名(英文)The Making of the Obsession with Things Victorian and Its Undoing

研究代表者

井野瀬 久美恵 (INOSE, Kumie)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：70203271

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヴィクトリア朝を専門とする歴史学者と現代日本思想・風俗を専門とする社会学者とのコラボレーションを大きな特徴として、イギリスないし旧植民地、さらには日本でも顕著に認められる現代の文化現象、「ヴィクトリア朝的なるものへのオブセッション」の起源と展開のプロセスを分析した。21世紀に入った日本で顕在化したロリータファッションを含む「カワイイ文化」とヴィクトリア朝文化との親和性には、明治日本以来醸成された「男らしさ」の変容とともに、それを乗り越える戦略も読み取れる。「ヴィクトリア朝的なるものへのオブセッション」は、単なる文化の脚色・改作を超えて、日本の立ち位置を探る指標ともなりえる。

研究成果の概要(英文)：Since the turn of the century, the obsession with Things Victorian has become a modern-world cultural phenomenon found, not only in British Isles but also in Eastern Asia, including Japan. This phenomenon is sometimes called “Neo-Victorianism”, but it is not so easy to see that this adaption of Things Victorian is just rooted in nostalgia for “the good old days” of the Victorians. Why has the Victorian period influenced such a variety of cultures in the early 21st century? The aim of this joint research is, through a discussion between historians and sociologists, to analyze how this obsession was made, developed and remade up to our own time, overcoming much violence in the 20th century. One of the interesting results of our discussion is that making of so-called “Kawaii cultures” in contemporary Japan including “Lolita fashion” was closely connected with the process by which this obsession developed, morally as well as materially.

研究分野：人文学

キーワード：ヴィクトリア朝文化 ネオ・ヴィクトリアニズム オブセッション ノスタルジー 第一次世界大戦 再記憶化 ロリータファッション ツーリズム

1. 研究開始当初の背景

ヴィクトリア女王の治世(1837-1901)、いわゆるヴィクトリア朝時代は、政治、経済、社会、文化、文学、科学技術、教育等、いずれの領域においても、独特の価値観や世界観、モラルが生まれ育まれた時代として知られる。他の君主の統治期に比べて、研究蓄積が圧倒的に豊かであるのも、64年近いその治世の長さとともに、この期間に変化、再編、発展した思想や概念、制度や組織が、現代世界の基底を成しているからだと思われる。この時代を多角的に扱う雑誌 *Victorian Studies* は、1956年の創刊以来、国際情勢や時代の変化に対応しつつ、高い質を保ちながら現在に至る。と同時に、なぜ1956年にヴィクトリア朝時代を対象とする専門雑誌が生まれたのかは、改めて考えてみる必要がある。

加えて、イギリス帝国の拡大期と重なるヴィクトリア朝時代、とりわけその後期は、「帝国主義というグローバル化」の開始の時期であり、経済のみならず、技術や学知、情報、環境等のグローバル・ネットワーク構築の時代としても注目される。それゆえに、このネットワークに内包された日本でも、幕末から明治時代をほぼ網羅するヴィクトリア朝イギリスへの関心は、今なお極めて高い。その一例を、2001年、「文学、歴史、経済、美術などのジャンルを通じた研究に基づきながらも、そのジャンルのみにとらわれることなく、広い視野からの学際的研究によりヴィクトリア朝イギリスについての理解を深めること」を目的に設立された「日本ヴィクトリア朝文化研究学会」の活動に認めることができよう(上記「」内は同学会HPより引用。2011年11月より同学会事務局は、本研究拠点である甲南大学に移管)。

「一君主の治世を“ひとつの時代”として括ることにどれほどの意味があるのだろうか」という批判を一方に受けながらも、多くの著作や論文が、今なお、「19世紀イギリス」や「イギリス近代」ではなく、「ヴィクトリア朝イギリス(Victorian Britain)」という表現を使用し続けている。それは、この時代に出現した知や情報、様々な作品、そしてそれらを支える価値観や世界観、概念や用語、考え方の枠組みなどに、「近代」や「19世紀」といった切り取り方ではうまく見えない時代性が、イギリスのアイデンティティ(のようなもの)が認められる/感じられる/存在するように思われるからだろう。本研究が重視するのは、まさしくこの「自分たちを説明する何か、あたかも存在するような感覚」である。

たとえば、各国の文学や歴史、ないし学際的な研究対象とされる「文化」への視座を広げ、理解を深めることを目的に編まれた“Cambridge Companion to Culture シリーズ”は、「近代(Modern)」と国名(の形容詞形)をタイトルとしているが、イギリスに関しては、「ヴィクトリア朝文化(Victorian

Culture)」を「イギリス近代文化(Modern British Culture)」と同時に出版した(正確には、前者が後者より半年早く公刊されている)『ヴィクトリア朝文化』の編者は、歴史のカテゴリーとして「ヴィクトリア朝(1837~1901)」という時代区分自体に特別の意味があるわけではないし、そこに何か一貫した見方や考え方があるわけでもないといいつつも、その後次のように付記している。

「“ヴィクトリア朝の(Victorian)”という括りを、単なる時代区分を超えて意味あるものにしていくのは、当時の人びとの“文化”へのこだわりである」(ed. by Francis O’Gorman, *The Cambridge Companion to Victorian Culture*, Cambridge: Cambridge University Press, 2010, p.5)。

ここにいう「文化」とは、あらゆる人間の営みを包み込み、「個々の事物や人、ないし言説や活動を創造し、それらと交渉する、知的、物理的、経済的、社会的な環境」(*Ibid.*, p.6)のことであり、本研究でもこの意味で「文化」という言葉を使用する。こうした概念については、研究代表者である井野瀬を編者に、高田・小関両研究分担者が執筆に加わった『イギリス文化史』(昭和堂、2010年)の構想、執筆過程でも議論してきた。本共同研究はその延長線上にある。

そのうえで、本研究は、「ヴィクトリア朝文化」と表現される思考や行動の枠組みが、21世紀の今なお、イギリスのみならず、かつてイギリスが公式、非公式に支配した地域でも、ある種の「参照軸」となっていることに着目する。たとえば、以下がその例である。(A)世界で初めてロンドンで開催(1851)された万国博覧会という事物展示の仕組み。

(B)そこで可視化された数多くの発明(鉄道や電話、カメラ、映画、電灯、蓄音器、車、海底ケーブル等)が、人間の空間認識や他者との関係性に与えた変化。

(C)全国紙『タイムズ』のウィリアム・H・ラッセルが初の従軍記者として同行したクリミア戦争以降、リアルに届けられるようになった情報を通じて生活に溢れはじめた戦争と「戦争の記憶」。

(D)「人間の心、靈魂は死後も存在するか」という真摯な問いと心霊主義の流行。

こうした思考や行動の枠組み、問題意識からは、「ヴィクトリア朝」という時代が、1901年の女王の死で終わったわけではないことは明らかだろう。

実際、女王崩御直後から、その価値観や世界観は直後の世代から強い反発を受けるが、その批判自体、その後の時代・社会のなかで大きく変質し、やがてノスタルジーともなっていく。そのなかで、「ヴィクトリア朝的なもの(Things Victorian)」は、イギリスの人びとのものの考え方や感じ方、さらにはイギリスから強い影響を受けた旧植民地の人びとの思考までも拘束する、いわば「幻想」にまで成長していったと考えられる。だからこ

そ、新聞・雑誌等数多くの書評で取り上げられたマシュー・スウィートの著作『ヴィクトリア朝人の創造』(2001)は、次のように主張する。

「ヴィクトリア朝人は、われわれの生活と感覚を、それとはわからない無数のやり方で創造した。彼らは今なお、われわれとともにある」(Matthew Sweet, *Inventing the Victorians*, London: Faber and Faber, 2001, p.xxiii)。

われわれ現代人を拘束し続けるヴィクトリア朝人。ヴィクトリア朝時代をたえず「参照する/しようとする」現代人のまなざしを、本研究では「ヴィクトリア朝幻想」と呼び、ヴィクトリア女王の死の直後から始まるその形成過程を解明していく。この問題意識ゆえに、本研究は、歴史学者と社会学者のコラボレーションであることを最大の特徴とする。そして、この幻想を解体、脱構築しながら、われわれが生きている現代を考える新たな視座を得られればとも考えている。

2. 研究の目的

ヴィクトリア朝(1837-1901)は「文化」に強いこだわりを見せた時代であるとともに、その思考や行動の枠組みや問題意識、価値観や世界観は、反発にせよ郷愁にせよ、その後の時代に与えた影響は深く大きい。「ヴィクトリア朝的なるもの」は、今なおイギリスや旧植民地の人びとを、さらには、明治日本はじめ、かつてヴィクトリア朝イギリスから政治、経済、社会、文化などの点で強い影響を受けた国家や地域、人びとの思想や価値観をも拘束しているように思われる。

本研究では、21世紀初頭の今なお、「われわれとともにある」と言われるこの時代へのオブセッション、この時代への(ある種の憧れを伴った)まなざしを「ヴィクトリア朝幻想」と呼び、その本質を考えるために、その形成過程を具体的に見直すとともに、この幻想を解体、脱構築するなかで、社会学的思考を加えながら、われわれ自身とわれわれが生きている現代を見直す「新たな視座」を得ることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトの構成員5人のそれぞれの研究課題は以下の通りである。

* 井野瀬久美恵：「博愛主義の帝国」幻想の脱構築 「野蛮」と「文明」の境界線をめぐる攻防

* 高田実：「ヴィクトリア朝価値観」の脱構築 「自助」と「リスペクタビリティ」をめぐる言説と実態を中心に

* 小関隆：「平和的王国」の幻想 第一次世界大戦後からヴィクトリア朝をふり返る

* 藤本憲一：イギリスの「外」からの「ヴィクトリア朝幻想」の逆伝達現象

* 工藤保則：「見せる/見る」装置におけるヴィクトリア朝イギリスと現代日本の連続性

各自の課題を中心にしつつも、より多面的に「ヴィクトリア朝幻想」の形成と変質、再形成を捉えるために、定例の研究会を開き、そこで、この「幻想」と関わるテーマを研究する専門家から報告を聞いた。歴史学と社会学それぞれの関連研究成果、特に書評については、研究代表者、分担者の間でメール等による情報交換を定期的に行い、それらをどのように研究に取り入れるかもメール会議を適宜行った。

4. 研究成果

(1)本研究は、歴史学と社会学とのコラボレーションであることを最大の特徴とする。この2つの学問領域で「ヴィクトリア朝幻想」をどのように捉えるか、それぞれの課題や問題意識とのすり合わせ自体、専門分野を横断する成果といえるだろう。このとき確認されたことは以下の通りである。

「ヴィクトリア朝幻想」は、現代の日常生活、われわれの感覚や感性と多様かつ深く関わっている。

20世紀前半の2つの世界大戦、後半に起こった植民地主義の変容、脱植民地化とポストコロニアル状況、冷戦体制の崩壊、ヨーロッパ再編(EUとその拡大)などの国際情勢の変化 こうした歴史の「大きな物語」と関わりながら、そして、その「物語」の下で生じたイギリス社会の変容を反映、相対化しながら、「ヴィクトリア朝幻想」は、構築、再構築されていった。

現代世界の「ヴィクトリア朝幻想」と直接関わる問題としては、1990年代以降のツーリズムがあげられる。それは、ヴィクトリア朝中産階級の価値観を強調したサッチャリズムへの評価や反動など、現代政治と通じている。

この幻想と関わって、近年日本でも数多く翻訳された/今なお翻訳されつつある、(いわゆる)「ネオ・ヴィクトリアニズム」とよばれる小説群の調査、分析は、まだ緒に就いたばかりであり、整理・分析の必要がある。

(2)歴史学者と社会学者との議論のなかで浮かび上がった具体的な問題のひとつは、「なぜ21世紀の現代世界で、ヴィクトリア朝ないしヴィクトリア朝文化と銘打たれたものが売れるか」ということだった。過去へのノスタルジーはいつの時代にもある。「ヴィクトリア朝幻想」もそうしたノスタルジーのひとつに過ぎないのか。たととしても、21世紀の今、なぜ「ヴィクトリア朝」なのか。

これらの問いを考えるうえで、本研究が注目したのは、21世紀初頭の「日本からの発想」である。日本では、『下妻物語』(2004年映画化)以降、特に都市部で、若者文化と

してのロリータ・ファッションが顕在化した。2009年には、外務省のポップカルチャー発信使(通称、カワイイ大使)の一人として、ロリータ・ファッションのカリスマ的存在、青木美沙子氏が選ばれた。本共同研究が目にしたのは、こうした国際的現象化しつつあったロリータ・ファッションとヴィクトリア朝文化との強い親和性であった。

研究会では、ロリータ・ファッションを卒論に掲げた本学学生への聞き取り調査を含めて、このファッションに付随する多様なコード(この衣装を身につける若い女性たちの間に成立している暗黙の合意)が、ヴィクトリア朝時代に創造/想像された価値観や具体的なモノと密接に結びつき、イメージ化されていることを明らかにした。とりわけ、1850年代、ヴィクトリア朝美術界で改革を試みた若手芸術家集団「ラファエロ前派」の美意識と多様につながっていることが確認された。そのことに無自覚なままに、21世紀の今、イギリス(そしてフランスやロシアなど)の若者たちが、ロリータ・ファッションを「日本発の文化」として受容している事実は興味深い。それは、単なるノスタルジーを超えて、別の時代的・地域的コンテクストにおける「文化再生産」のプロセスでもある。

(3) 勤勉・禁欲的をよしとし、父権的家族像を確立し、外から見られることを意識したリスペクタビリティという価値観を浸透させた中産階級の時代、ヴィクトリア朝の文化が、～の変質・崩壊過程にあった日本の若者文化となぜ親和性があるのか。それを考えるキーワードは、21世紀に入った日本社会に台頭した「カワイイ」という言葉だといえる。この言葉と文化に関する社会学者二人の研究は、ヴィクトリア朝と現代との関連を考えるうえで、きわめて刺激的であった。

「カワイイ」(スマート、小ぶり、そのうえでのキャラ感)は、「未成熟」と関わる従来の日本語「かわいい」を置き換え、「かわいくない」ものを「カワイク」させている。それは、伝統や権威、それと関わる成熟(おとこおとな化)とは異なり、そうした「成熟」や「ツヨイ」もの(=おとなおとこ)へのアンチテーゼであるとともに、「ツヨイ」「成熟」の(否定的)進化 成熟して大きく強くなるのではなく、さらにその先、小さく軽くなる でもある。

その意味で、「カワイイ」は文字通り、世界観といえる。それは、明治の文明開化・富国強兵以来、ヴィクトリア朝の影響下で欧米の「優等生」として帝国主義を推進してきた、「ツヨイ」をよしとしてきた世界観の転換を示すものである。日本は今や、「おとこおとなのツヨイ」領域を「カワイイ」領域に塗り替える世界的な文化発信源となっているが、それがヴィクトリア朝の文化表現・表象をツールとしていること(=現象としての両者の親和性)は、そこに認められるいくつかの括

れとともに、「ヴィクトリア朝幻想」の現代的展開である。

(4) こうした社会学者を中心とする現代日本社会分析は、イギリスの福祉に関する再検討と呼応する。すなわち、共同性を利用する「強い個人」の側から見るのか、それともそれを支え、万が一の際に「依存」を許容する共同性の安定的存在の側から見るのかで、「自立」は正反対の歴史的事象として描かれる。本研究では、生身の人間と触れ合う対人ケアの有機性を踏まえるなかで、「自立」論を脱構築する可能性を検討することができた。それは、社会改革の際につねに参照されてきたイギリスのヴォランティアズムが、実は国家に強要されてきたというパラドックスとも通底する。

ラスキンは「生なくして富は存在しない」という有名な言葉を用いて、金銭的富を追い求める19世紀イギリス社会のあり方を批判した。今見るべきは、貨幣が蓄積され「豊かさ」が増進すればするだけ、「生」の危うさが問題にされていく、ヴィクトリア朝社会における豊かさの逆説と生の再発見が、現代世界で再現されていることなのである。

(5) 共同研究開始時期が第一次世界大戦勃発100周年へ向かう時間と重なったことから、歴史学メンバーはこの戦争の記憶と記録に関わった。そこから、下記小関氏の業績にあるように、日本の第一次世界大戦研究を国際レベルにまで高めるものも生まれた。

また、ヴィクトリア女王の「最後の戦争」(そして女王の後継であるエドワード7世にとって「最初の戦争」)である南アフリカ戦争(1899-1902)が刺激・高揚させた軍国主義の内実 「陽気なエドワード期」と表裏一体で大戦を招き寄せることになる、イギリス/大英帝国の未来に対する(漠たる)不安は、「ヴィクトリア朝幻想」生成の大きな原動力であったが、その状況は、現在の東アジア国際情勢とも重なっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

工藤保則、「カワイイクルマとカワイイ都市」『情報美学研究』査読無、4巻、2015年、30-39

小関隆、リレーエッセイ「第一次世界大戦を考える(5)オペラ『銀の杯』の鮮烈な幕切れに漂う、戦争記念公園のそれと似た寒々しさ」『図書新聞』査読無、3144号、2014年、4頁

小関隆、(解題)「第四世代の第一次世界大戦研究とその先」(翻訳)ジェイ・ウィンター「破局を記念・追悼する:100年後の第一次世界大戦」『思想』、査読無、1086巻、2014

年、69-88

高田実、「ヴォランティアな社会としてのヴィクトリア朝 イギリス的自由主義の歴史的展開」『ヴィクトリア朝文化研究』査読有、12巻、2014年、28-36

藤本憲一、「ながらスマホでファッションフード、ときどきお菓子作り、常時おしゃべり」『vesta』(食文化誌ヴェスタ) 査読無、93巻、2014年、18-21

井野瀬久美恵、「スポーツにおけるミッションは終わったのか？」『スポーツの苦悩を探る』(スポーツ学会第26回大会シンポジウム報告書) 査読無、2013年、2-20

小関隆、「歴史叙述と「想像力」：戯曲を素材に」大浦康介(編)『フィクション論への誘い：文学・歴史・遊び・人間』(世界思想社) 査読有、2013年、211-23

小関隆、「書評：津田博司『戦争の記憶とイギリス帝国』」『歴史学研究』、査読無、910号、2013年、55-58

藤本憲一、「SHIKOHINの距離学 若者の“ソトごもり”の謎を解く」『TASC MONTHLY』、査読無、454巻、2013年、13-22

小関隆、「第一次世界大戦研究の現段階：京都大学人文科学研究所の共同研究を中心に」『西洋史学』査読有、245号、2012年、31-42

藤本憲一、「モバイル」のデザインと美学 ポケベル・ケータイの四半世紀の変遷」横川公子(編)『生活の美学を探る(「生活環境学の知」を考えるシリーズ1)(光生館) 査読有、2012年、101-112

藤本憲一、「ケータイの流行と”モビリティ”の変容」岡田朋之、松田美佐(編)『ケータイ社会論』(有斐閣、査読有、2012年、177-198

[学会発表](計 17 件)

Minoru Takada, Comment on Francesco Chiesa's Paper 'Redistribution and Recognition: Welfare State Redistribution and Recognition: welfare in time of Multiculturalism: the case of Roma and Gypsy Travellers' 2015年3月20日、一橋大学(東京都・国立市)

高田実、「レッセフェールの市場社会の歴史的再検討 アメリカ・フランス・イギリスを中心として」九州西洋史学会、2014年11月29日、熊本大学(熊本県・熊本市)

藤本憲一、「関与シールドとしての嗜好品 ゴフマン社会学の視点から」第78回日本心理学大会、2014年9月10日、同志社大学(京都府・京都市)

井野瀬久美恵、「第一次世界大戦前ヨーロッパのナショナリズムと民衆心理」政治経済学・経済史学会春季総合研究会シンポジウム「第一次世界大戦開戦原因の謎：国際分業が破壊される時」、2014年6月28日、東京大学本郷キャンパス(東京都・文京区)

高田実、「教育とヴォランティア」(コメント) 比較教育者開始研究会春季大会、2014

年3月15日、西宮市大学交流センター(兵庫県・西宮市)

井野瀬久美恵、「特別対談」歴史と文学の対話 伝記を手がかりにして」日本ヴィクトリア朝文化研究学会第13回大会、2013年11月9日、甲南大学岡本キャンパス(兵庫県・神戸市)

高田実、「シンポジウム「ヴィクトリア朝とヴォランティア」(司会・趣旨説明) 日本ヴィクトリア朝文化研究学会第13回大会、2013年11月9日、甲南大学(兵庫県・神戸市)

小関隆、「シンポジウム「第一次世界大戦再考」(司会・趣旨説明) 日本西洋史学会第63回大会、2013年5月12日、京都大学吉田本部キャンパス(京都市・左京区)

高田実、「社会サービス全国協議会の成立とボランティア・アクション 福祉の複合体の有機化をめぐる」九州歴史科学研究会、2012年12月22日、西南大学(福岡県・福岡市)

井野瀬久美恵、「スポーツにおける英国のミッションは終わったのか？」スポーツ史学会 第26回大会、2012年12月1日、甲南大学岡本キャンパス(兵庫県・神戸市)

井野瀬久美恵、「カリブ海域の奴隷人口はなぜ増えなかったのか？」比較文学会 第34回中部大会 シンポジウム「帝国と女性 イギリス、カリブ海域、アジア」2012年11月24日、名古屋大学(愛知県・名古屋市)

Kumie Inose, "What is remembered and what is forgotten in the Bicentenary of the Abolition of the Slave Trade in Britain", International workshop "Sugar and Slavery towards a New World History", 18 November 2012, University of Tokyo(東京都・文京区)

井野瀬久美恵、「翻訳という営みと言葉のあいだ 21世紀世界における人文学の可能性」What Words Can Tell Us Through Translation: The Future of the Humanities, 第28回京都賞ワークショップ(思想・芸術部門)、2012年11月12日、国立京都国際会館(京都府・京都市)

高田実、「救援ギルドとエルバーフェルト制度 20世紀初頭イギリスにおける「新しいチャリティ」と地方の福祉」政治経済学・経済史学会、2012年11月10日、慶応義塾大学三田キャンパス(東京都・港区)

井野瀬久美恵、「謝罪のポリティクス 奴隷貿易廃止200周年とは何だったのか？」七隈史学会 第14回大会、2012年9月29日、福岡大学(福岡県・福岡市)

藤本憲一、「寝室地図」調査法から、「眠主(みんしゅ)」的な「ねむりの哲学」構築へ」第21回日本睡眠環境学会学術大会、2012年8月23日、奈良女子大学(奈良県・奈良市)

井野瀬久美恵、「自由と博愛のイギリス帝国 再考 せめぎ合う文明化と人種混淆」日本西洋史学会 第62回大会 小シンポジウム「西洋文明と他者 比較のなかの人種意識」2012年5月20日、明治大学(東

京都・千代田区)

〔図書〕(計 11 件)

井野瀬久美恵 他、『第一次世界大戦開戦原因の再検討 国際分業と民衆心理』「民衆感情と戦争 イギリスにおける「戦争熱」再考」、岩波書店、2014年、268(177-214)

小関隆 他、『現代の起点 第一次世界大戦 第1巻 戦争』、岩波書店、2014年、256(31-56)

小関隆 他、『現代の起点 第一次世界大戦 第2巻 総力戦』、岩波書店、2014年、267(31-54)

小関隆 他、『現代の起点 第一次世界大戦 第3巻 精神の変容』、岩波書店、2014年、278

小関隆 他、『現代の起点 第一次世界大戦 第4巻 遺産』、岩波書店、2014年、275(3-52)

小関隆 他、『イギリス文化事典』丸善出版、2014年、896(538-541)

井野瀬久美恵、「謝罪のポリティクス 奴隷貿易廃止 200 周年とは何だったのか？」『七隈史学』、15号、2013年、1-16

工藤保則、藤本憲一 他、『無印都市の社会学』法律文化社、2013年、284(22-35、40-51、258-266、267-268)

井野瀬久美恵、(解題)「サラ・パートルマンは眠れない ポストコロニアルにおける歴史小説の試み」(翻訳)『ホッテントット・ヴィーナス ある物語』、2012年、484(461-484)

高田実 他、『英国福祉ボランティアの起源』ミネルヴァ書房、2012年、235(1-20、159-183)

高田実 他、『近代ヨーロッパの探求15 福祉』ミネルヴァ書房、2012年、373(1-23、65-113)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井野瀬 久美恵 (INOSE, Kumie)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：70203271

(2) 研究分担者

小関 隆 (KOSEKI, Takashi)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：10240748

高田 実 (TAKADA, Minoru)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：70216662

藤本 憲一 (FUJIMOTO, Kenichi)

武庫川女子大学・生活環境学部・教授

研究者番号：00248121

工藤 保則 (KUDO, Yasunori)

龍谷大学・社会学部・教授

研究者番号：20314304